



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〔第九四号〕

立冬 りっとう

十一月七日



五十鈴川の水環境その二

いすず川影見る水も底すみて

神代おぼゆる峯の杉むら

と、影を映した五十鈴川は底まで澄んでいることよと和歌に詠んだのは江戸時代の国学者、本居宣長もとおりのりながでした。古くから詩歌にその清らかさを詠まれてきた五十鈴川は、化学的な見地からはどうなのでしょうか。

五十鈴川の水質調査は、五十鈴川をきれいにする会の井手口克利さんが浦田橋の下流で毎月行っています。「宮川流域いつせいチェック」の一環で、バックテストによる五項目の調査です。バックテストは試薬の入った容器に決められた量の水を入れ、色の変化によって調べる簡易水質検査で、手軽なため広く採用されています。

まずは、水素イオン濃度の計測から始めます。容器に入れた水は緑色に変化し、数値は7・5PHと判明。この水は中性であることがわかりました。続いて、川の汚れが数値で表れる化学的酸素要求量(COD)は2mg。上水道としての水質条件もクリアする大変良い値です。そのほかに、し尿や家庭排水の汚れを測るアンモニア0・2mg、有機物の汚れの亜硝酸0・02mg、赤潮などの原因となるリン酸0・05mgといずれも低い数値で、川がきれいであることがわかりました。井手口さんは、ここ数年数値が安定していると教えてくれました。

五十鈴川ではこの水質調査は浦田橋から1・5キロほど下った五十鈴橋の下田井堰せきでも行われています。その地点での調査結果を見ると、CODやアンモニアの数値が浦田橋よりやや高いことが気になりました。水の汚れを表すCODは水量が減ると数値が上がるそうで、きれいな川というのは、水量の豊かさも必要なのです。暦は冬に入る立冬。冬は「川涸れる」季節でもあります。

文 千種清美

